

# 伊藤 光男 元所長逝去

かねてより病氣療養されておりました伊藤光男先生（分子科学研究所元所長、岡崎国立共同研究機構元機構長、東北大学名誉教授）が令和元年11月14日にご逝去されました。伊藤先生は平成5年より第4代分子研所長、平成11年に岡崎国立共同研究機構長として、日本の学術行政が激変するなか、先を見据えた改革を数多く取り入れ、21世紀に向けた分子研の礎を作るという困難な事業を完遂されました。具体的には、国際的な視点から分子研を問う外国人運営顧問などによる点検評価の制度化、研究所の諸問題を議論しその将来構想を描く「分子研レポート」の発行、所員の交流や研究に対する意識を高める研究顧問が評価に参加する所長特別研究費ヒアリングの制度、研究所の活性化に尽力されました。所長時代には「分子制御レーザー開発研究センター」「分子物質開発研究センター」、機構長時代には山手地区に「岡崎統合バイオサイエンスセンター」を創設するなど、研究環境を大きく改善させました。若手の研究者の育成にも尽力され、「名誉助教授号」を贈られるなど、若手教員の人望が高い所長でした。伊藤先生の「科学は楽しんでやるものだ」との言葉に勇気づけられ、共同研究機構として所内外で水準の高い研究が数多くなされ、また分子研で育った多くの者が、日本の分子科学を支える柱になっております。死期が迫るなか最後に描かれた富士山の絵は、何かを語りかけているようです。伊藤先生のご貢献に対して深く敬意を表するとともに、心よりご冥福を申し上げます。



令和元年11月14日 永眠 享年90

分子科学研究所所長 川合 真紀



## 略歴

昭和26年 九州大学理学部化学科卒業  
 昭和26年 九州大学理学部助手  
 昭和28年 九州大学助手（理学部）（新制）  
 昭和35年 理学博士の学位授与（九州大学）  
 昭和35年 ウィスコンシン大学（アメリカ）博士研究員  
 昭和41年 東京大学物性研究所助教授  
 昭和45年 東北大学理学部教授  
 昭和47年 ナンシー大学（フランス）客員教授  
 昭和53年 分子科学研究所教授電子構造研究系（併任）  
 昭和58年 岡崎国立共同研究機構分子科学研究所運営協議員  
 平成5年 岡崎国立共同研究機構分子科学研究所長  
 平成11年 岡崎国立共同研究機構長

## 榮譽

昭和63年 日本化学会賞  
 平成元年 日本分光学会学術賞  
 平成9年 紫綬褒章  
 平成16年 瑞宝重光章  
 分子科学研究所名誉教授、  
 東北大学名誉教授、  
 総合研究大学院大学名誉教授  
 平成3年 日本化学会副会長  
 日本化学会 名誉会員、分子科学会 名誉会員

## 伊藤先生を偲んで 藤井 正明 (東京工業大学 科学技術創成研究院 化学生命科学研究所 教授)

伊藤先生には東北大学理学部化学科学部4年生の時から博士課程の指導教官の4年間、東北大学の助手8年間、分子科学研究所・教授時代の4年間、合わせて16年間、直接ご指導頂く機会に恵まれました。これ以外の期間も折に触れてご激励頂きました。ご冥福をお祈りすると共に心から感謝申し上げます。

ここでは主に東北大時代の事を書かせて頂きます。学部生にとって伊藤先生は怖い先生でした。講義は端正に組み立てられて内容に引き込まれるので、板書の旧漢字のままノートをとって同級生に笑われた記憶があります。研究室に入ってみると直ぐに厳しさと暖かさを合わせ持つ方である事が分かりました。四年生は岩波現代化学「光と分子」の先生の書かれた章をゼミ形式で勉強するのですが、新しい解釈を見つけた、この導出は間違ってる、とか、暴走する四年生の勉強会に毎回付き合っていました。研究報告の際はもっと直接的に議論して下さい、解釈が対立したときには本気で感情を込めて議論して下さいました。私が四年生になった時は丁度研究室のテーマを三上直彦先生がシカゴ大で開発された超音速ジェット分光に100%転換したときで、測定結果は全てが新しく、初の水素結合錯体の電子スペクトル(阿部晴雄先生)、vdW錯体(五戸成史さん)、多光子イオン化分光(村上純一さん)、無衝突での高速緩和(平谷篤也さん)そして二重共鳴分光(江幡孝之先生)などなど測定対象も方法論も百花繚乱で出た時で、議論につぐ議論という中、本気の先生によって鍛えられました。この時代、スペクトルはチャートという長い巻紙で記録されていたのですが、測定するとすぐにセミナー室で巻紙を広げ学生やスタッフだけではなく伊藤先生も隣の教授室からお出ましになって議論が始まっていました。解釈がつかないと関係者皆で集まって翌日再度の議論になるのですが、伊藤先生が先に解決の糸口を見つけることがしばしばありました。例えばポリエンの禁制電子状態を測定するつもりで二波長イオン化thresholdスペクトルを測定していたらthresholdの階段構造の中にたくさんのdipが出現し、我々はやれ超励起状態だとか言っていたら、翌朝開口一番、中間状態S<sub>1</sub>からS<sub>0</sub>への誘導放だ、と伊藤先生に解釈され、測定した本人はもちろん皆で大変悔しがりました。唯一明確に伊藤先生に「勝った」のは同期の奥山克彦君(日大)だけで、テトラフルオロベンゼンの電子スペクトルを伊藤先生が異性体2種で解釈していたらこれを非調和なプログレッションと解釈して2光子吸収スペクトルで実証することに成功しました。この時、先生は「負け」を認められたのですが「俺の解釈でも論文は書けたぞ!」と負け惜しみも取れるお言葉を言われ、ご自身の解析力に絶大な自信があることがよく分かりました。解釈は学生・スタッフ対伊藤先生の競争で研究はいよいよ盛り上がっていましたが、どうやっても敵わなかったのは論文執筆の速度です。先生は一晩で第一原稿を手書きで書き上げることが多く、「また先に書かれてしまった!」というメンバーが多かったです。教育的配慮で学生には一応書かせてくださることもありましたが、お渡しすると2、3ページは赤ペンが入るものの段々筆圧が強くなり、4ページ以降は大きな斜線が書かれて別紙にゼロから書かれることが非常に多かったです。あの執筆力はいまだに自分では追い付けず、心底尊敬しております。

研究室の行事は先生の存在で大変楽しく一体感のあるものでした。特にセミナー室での料理と宴会は楽しく三上先生が裁く初鱈とホヤとか、平谷さんの叩きや天ぷらなどお料理上手が作る中、先生は長机の中心におられて大変楽しいお話を聞かせていただきました。スケッチの思い出はもちろん、ナンシー大の謎のN-ray、パリの夜の繁華街、明太子は先生の実家が発祥だと確信しているとか、とにかく面白く、いまだに思い出してはニヤツとするものがあります。もちろん、先生ご自身の「一銭洋食」も振る舞って頂きました。そんな先生ですので、分子研の所長を勤められているときに当時の若手助教授らには絶大な人気があり、御退官時になんと「名誉助教授」というかつてない称号を受けられたのは象徴的で、先生がいかに愛され慕われていたかを良く示していると思います。機構長をご退任されて東京に戻られてからも訪問者も多く、まさしく先生のお人柄と思います。国内外で有名な伊藤先生のスケッチは名大の岡本祐幸さんのお世話で分子研の丘の麓にある葵丘会館に常設展示されるそうで、分子研に出張する際にはぜひ寄りたいと思っています。私の手元には先生から分子研教授着任記念に頂戴した岡崎城の水彩画があり絶筆となった富士山の水彩と共に眺めては先生に思いを馳せ、また、先生が心血を注いだ分子科学をますます発展させて次世代に繋げなくてはとの思いを強くしております。

先生、本当にありがとうございました。合掌。

## 伊藤先生ありがとうございました 福山 秀敏 (東京理科大学 理事長補佐、学長補佐)

「ピースハウス」におられる伊藤先生を 12月1日に数名で訪問する予定のところ、直前にご逝去の報に接しました、大変急でした。改めて「がん」という病の激しさを認識しました。8月末に「がん」のためにケア施設に移動されるとの突然の連絡があり、すぐに茗荷谷のお宅に何人かで伺ったときにはいつもと同じ様々な話に花が咲き、ずっと若い我々がむしろ元気づけられました。その時からの経緯は現実の出来事とはとらえることが困難でした。

亡くなられるほんの数日前にご遺族が撮影された映像では富士山に向かって大変すっきり澄んだ表情で絵筆を取っておられるお姿からは遠親した人とはこのような方なのかと思えました。今まで画廊で何回か拝見した先生の絵に岡本祐幸さんのご尽力で葵丘館に行けばいつでも拝見できるとのこと、先生もおよこびのことと思います。

伊藤先生に初めてお目にかかったのは 1975 年だったと思います。1974年春に私はベル研から当時片平にあった東北大理学部物理教室に戻り、間もなく助教授となりすぐに青葉山へ引越し、直後に理学部の委員会に引き出されましたが、その委員長が伊藤先生でした。何か何だかよくわからない委員会でしたが伊藤先生の委員会差配が明快で大変楽しかった記憶があります。この委員会に参加することになった理由が長い間不明でしたが、伊藤先生「思い出すま」(1992年)を拝見して想像が付きました。そこには、伊藤先生が 1970 年に東大物性研究所から東北大へ移動されたこと、さらにその際茅幸二さんを助教授として選ばれて研究室を発足されたとありました。実は 1973-74 年ベル研滞在中に茅さんもベル研におられ、お宅には何度か伺ったことがあります(茅さんご夫妻はマージャンの超達人、当方家内共々子ども扱い)ので、これが始まりなのだろうと思います。その後 1990年代伊藤先生が議長の分子研評議員会でも先生の楽しくかつ本質を捉えた明快な「さばき」は大変印象的でした。当時伊藤所長と助教授団の間で率直な、時には激しい、意見交換があったこと、その経験を積んだ助教授・助手団が後年分子研を離れても「伊藤門下」を呼称し、機会あるたびに伊藤先生とご一緒することを知りました。

2015年初頭に奥様が亡くなられた後、この「伊藤門下」の方々に誘われて茗荷谷のお宅を訪問しましたが、「おなぐさめ」という名目で伺った我々が逆に大きな励ましを頂きました。そのうち伊藤先生を囲んで「論壇風発」する会合が「伊研会(いいかい)」と呼ばれるようになり、回を重ねました。先生お気に入りの浅草「神谷バー」、理科大での「つきじ直送」等、様々でしたが、いつも伊藤先生のはじけるパワーと「思い出すまに」にも紹介されている抱腹絶倒の語りに時を忘れ、しばしば「親戚の叔父」と一緒にいるような気がする こともありました。そのようなとき、いつも心に残る多くの言葉を伺いました。その根底には『私は若い人にはたとえ悪いところがあっても、よいところを見つけてそれを褒めてやるのが大切だと思っています』という「思い出すま」に書いておられる優しいお気持ちがあったのだと理解しています。

伊藤先生いろいろありがとうございました。心よりご冥福をお祈りいたします。



分子研コロキウムにて (1993年4月14日)

分子科学研究所コロキウム (第 578 回)

題 目 新米所長、自己紹介

講演者 伊藤光男所長

日 時 平成 5 年 4 月 14 日 (水) 16 時 00 分 ~ 17 時 00 分

講演要旨 伊藤という人間について知ってもらうために、私の辿ってきた道を思い出すままに漫談風に話したいと思います。大変不真面目でひんじゅくを買うものになるかも知れませんが、お許し願います。

## 偉大な所長であり画家であった伊藤光男先生

岡本 祐幸 (名古屋大学 大学院理学研究科 物質理学専攻 (物理系) 教授)

私が伊藤光男先生に初めてお会いしたのは、私が1995年1月に受けた分子研理論研究系助教授の面接の時でした。面接が終わって、私が研究棟201号室を出た時に、私のすぐ後に出て来られて、一言二言声を掛けて頂いた白髪の紳士が伊藤先生でした。お会いして、すぐにこの方は偉い方なのだというオーラが出ておられました。私が分子研に着任した頃は、伊藤先生は年度末に、教授や助教授の中の希望者に海外からの研究者を1人、1週間程分子研へ招聘する追加予算配分を下さっていました。私も手を挙げましたが、その時に、伊藤先生が私に以下のようにおっしゃいました。「既に有名な大御所よりも、君と同年代の若い研究者を招聘しなさい。そうすれば、長い間研究の交流ができるからね。」私はその時、目から鱗が落ちる思いがしました。一流の研究者というのはこういう考え方をするのだなと感心した次第です。分子研では教授と助教授が出席する教授会が月に一度開催されていましたが、教授会での伊藤先生の采配も見事でした。我々助教授にも好き勝手な(?) 発言を許して下さっていました。分子研では助教授は教授への昇進を禁じられていますので、多くの助教授は、自由に発言していました。議論が長引いて本心は困っておられたのだと思いますが、「よく言うよ。」と顔を真っ赤にされて怒られることはあっても、私達の発言を制止されることはありませんでした。流動助教授として東工大から2年間分子研に滞在された細野秀雄さんが、分子研を去られる最後の教授会で、「分子研の助教授が羨ましいです。一度でいいから、うちの教授会で同じように言ってみたくです。」というようなことを言ったのが記憶に残っています。また、私が着任した当時、教授会では緑茶がテーブルの上に置かれ、いつでもお茶が飲めましたが、1時間が1時間半経った時に、休憩としてコーヒーが一杯全員に配られていました。それが私達にとっては教授会における楽しみの一つでした。しかし、ある時、伊藤先生が、「予算が足りなくなったので、これからはコーヒーを廃止します。」とおっしゃいました。そして、その日だけでしたが、全員に和菓子が一個ずつ配られました。粋な計らいだなと思った次第です。伊藤先生は、特に、助教授の間での人気が高く、助教授会と呼ばれる助教授の懇親会にもよく参加して下さいました。ある助教授会で楽しく酒を飲んでいましたら、伊藤先生と濱広幸さん(現東北大)が大きな声で言い合いを始めました。濱さんがその日の教授会での伊藤先生の議論の進め方を批判し、それに対して伊藤先生が反論されているようでした。皆、びっくりして2人を眺めていましたが、2人は既に立ち上がり、その距離がだんだん近づいて行きました。50センチまでになった時に、田原太平さん(現理研)と私が伊藤先生と濱さんを後ろに引っ張り、事無きを得ました(田原さんの制止はその場にいた多くの助教授の記憶に残っているようですが、一応、私も必死に止めていました)。伊藤先生の宿舎でお酒を初めてご馳走になったのは、確か、着任後1年目か2年目の新年交際の時だったと思います。午前中に会が終わった時、伊藤先生がそばにいた谷村吉隆さん(現京大)に「飲みに来るか?」と言い、一緒にいた私にも「岡本もどうだ?」と誘って下さいました。谷村さんは既に伊藤先生宅で何度か飲んでいたようですが、私には、一介の助教授が所長宅にお邪魔するなど考えたこともなかったので躊躇しましたが、結局谷村さんに付いて行きました。それから、親しくさせて頂いて、伊藤先生が岡崎を退職されて東京に引っ越されてからも東京出張時によく茗荷谷のお宅にお邪魔しました。

多くの読者の方もご存知だと思いますが、伊藤先生は水彩画をやっておられました。私達には、「50歳になったら趣味を始めなさい。停年後になんて思っていたら、なかなか上達しなくて手遅れだよ。」とおっしゃっていました。2003年に久保亮五氏関係の講演会に行った時、受付で久保氏の画文集が売られていたので購入しました。それは、久保氏の受勲を記念して出版されたものでした。私はその内容の素晴らしさに感動し、伊藤先生も将来受勲された時にぜひ画文集を出版したいと思います。2004年に瑞寶重光章を受章されたので、この提案をしたら、ご快諾頂きました。2、3週間ぐらいで絵を選び、それぞれの絵の説明文を書いて来られたのでした。そして、画文集「思い出すまま その2」が出版されました。伊藤先生ご夫妻にはお子様がいらっしやらないので、伊藤先生が40年に渡り描いてこられた3千枚の絵がどうなるのかと私は心配しておりました。そして、ある時、伊藤先生に、「信州を旅行していると森の中に小さな美術館を見かけることがよくあります。私達分子研関係者や東北大伊藤研のOBの方々から寄付を募って伊藤美術館を建てたらどうかと思います。」と言いましたら、「費用は自分で出すから前向きに考えたい。」とおっしゃいました。私は念のために、分子研時代の私の博士研究員だった西川武志氏(現計算科学振興財団FOCUS)

に相談しました（彼は世情に明るいので）。西川氏が言うには、「美術館を建てることは可能でしょうが、それを長く維持しようとすれば、大変なお金がかかり、不可能です。むしろ、既存の美術館に伊藤先生の絵を寄贈して常設展を開いてもらうのが賢明です。そして、それを頼むべき美術館は分子研とも縁のある葵丘の他は考えられません。」と言いました。それで、伊藤先生に予定変更を申しましたら、最初は、「自分はいくまで素人だから葵丘に申し訳ない。」とおっしゃいました。しかし、私が葵丘館長の小原淳氏にお願いして、ご快諾頂けたことを伊藤先生にご報告しましたら、大変喜ばれたのでした。葵丘での常設展（分子研レターズ75で小文を書きました）では、6枚の水彩画が展示されており、3ヶ月に一度、伊藤先生が岡崎まで来られて、絵の差し替えを行って来られました。しかし、昨年9月に伊藤先生が緩和ケア病院に入院されてからは、私が代わりに3ヶ月に一度絵の差し替えに行っております。なお、これらの絵は私のホームページの中の「伊藤光男画伯 画集・画文集」で見ることができます。Google等で「伊藤光男画伯」を検索して下さい（なお、以下の鹿野田氏の文章で出てくる「漫談」は伊藤先生が東北大を退官された時に出版された画文集「思い出すまま」に掲載されており、上のホームページで読むことができます）。最後に読者の皆様にはお願いですが、これから私達が世を去り、残った家族が特に伊藤先生の絵をキープしたいというのであれば、額から絵だけを取り出して、葵丘に送って頂けるように、家族に伝えておくようにして下さい。かなり良い作品が皆様の手元に揃っているはずですので。何百年か後に伊藤先生の絵を葵丘で誰かが鑑賞していることを想像すると楽しいです。以上、思い出すままに書きました。改めて伊藤先生に感謝の意を表するとともにご冥福を祈ります。



紫綬褒章祝会にて（1997年5月27日）

## 伊藤光男先生を偲ぶ 鹿野田 一司（東京大学 大学院工学系研究科 教授）

所長漫談。分子研のセミナー室は、大爆笑の渦に包まれていました。1993年、伊藤先生が分子研に着任されました。助教授3年生の私は、失礼ながら伊藤先生を存じ上げておらず、どのような所長先生なのか興味津々のところ、伊藤先生による冒頭の連続セミナーが企画されました。幼少期、少年期、青年期そして研究者へとその時々甘辛のエピソードと先生の思いを率直に語られる姿に、ご自分をさらけ出すことで、生身の人間として我々と付き合いっていくというメッセージを感じ取りました。笑いの連続の漫談でしたが、先生が「痛みの分かる人間」を繰り返しておられたことが印象に残っています。

伊藤所長と助教授連との懇談会（飲み会）は正に裸の付き合いの場でした。楽しい会でしたが、酒が回り裸度が増

すにつれ、研究内容から研究姿勢まで議論が熱を帯び、私は先生から「貴様、そんな心構えで研究しているのか」と。私も「この分からずや」的な言葉を返してしまいました。分子性物質の物理研究（私の分野）は、化学者から試料の提供を受けて初めて可能になるので、試料が命なのです——そんなに大切なのか？——もちろんです——それなら自分で作らないのはおかしい。こんなやり取りでした。私達物理屋からすれば溶液を使う試料作製には大きな壁があり、何を理不尽な事を……と反発した私でしたが、後になって伊藤先生の言葉の意味を悟りました。実は当時、固体NMR実験のために分子に同位元素をラベルする合成を、中筋先生、森田さんの指導の下、私のグループで進めておりました。これがうまく行き、その後、NMR用途に限らず様々な既知物質をつくれるようになりましたが、これが研究の幅を大きく広げ新しい研究の展開へと繋がりました。大切なところは自分でやれ、そこから新しい研究の力が湧く——これが伊藤先生の言葉の真意だと思っています。

伊藤先生は、分子研の若い研究者を伊藤流で元気づけました。助教授連は、お前達が分子研を引っ張るのだと乗せられ、私たちはそれに乗ったという思いがします。暴言を吐いた私は冷や飯を覚悟したのですが、先生から物心両面で支援していただきました。「お前の全体を見渡す研究スタイルがいい」との先生の言葉が一若手研究者にとってどれだけ励みになったことか。一方で、伊藤先生は正すべきことは正すという凛とした所長でありました。毎年行われる研究経費配分のためのヒアリングで、「面白い結果が出ているのは分かった。で、論文はいつになる？」と問われ、すぐには……と言いつつをしたところ「論文というもの、熱いうちに一気に一晩で書くものだ」と一喝されました。伊藤先生は画集「つれづれに5」でこう書かれています。「……これはという対象を見つけ座り込んで絵を画きながらの気持ちの昂ぶりは特別のものがあります。昔、研究で見出した新事実に興奮し論文原稿を書きながら通じるものがあります。……」伊藤先生の直球勝負のサインに応えるだけの球を持ち合わせていませんでした。伊藤先生は、私達助教授にピリッとした空気で清々しい風の吹く研究の場を提供してくださいました。“分子研名誉助教授”の称号は助教授連から先生に贈られた感謝の証です。私は、30代半ばにこのような環境で研究に勤しむことができ、本当に幸せでした。私が、6年間お世話になった分子研をスタッフを残して去ることになった時、伊藤先生はこの事には何も触れず、ただ「頑張れよ」と。心に沁みる言葉でした。

昨年11月3日（ご逝去される12日前）に、家内と共に先生の入院先を訪ねました。ベッドから真正面に見える所に微笑む奥様の肖像画がありました。先生の故郷名産の辛子明太子を持参したのですが、後日、これは伊藤先生にとってとんでもない代物だったことを随筆集「思い出すま 1992」を捲っていて知りました。先生、ごめんなさい。ベッドに横たわりながらも病気について気丈に語られる御姿は、いつもの伊藤先生でしたが、別れ際、先生が大きく手を振ってこちらを一点見つめる表情は今でも忘れません。

私は、伊藤先生から研究の直接的な指導を受けておりませんが、私は先生を恩師だと思っています。自宅と大学居室に飾っている先生の絵は、いつまでも、凛として暖かい伊藤先生を思い出させてくれます。伊藤先生、ありがとうございました。



伊藤光男画集「つれづれに」